

菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（十四）——

焼山廣志

一

今まで十三回に亘って『菅家後集』の作品の全注釈を試みて来たが、今回より作品中、最大の長編である、五言排律、「484 敘意一百韻」の注釈に移りたい。この作品については現在、詳細な注釈が柳澤良一氏により公にされつつある。¹⁾重複のそしりを免れないが、この学恩の驥尾に付しつつ、筆者なりの作品の解釈を以下に展開してみたいと思う。今回は第一句から十六句までの注釈を試みる。

具体的に注釈を進める前に、この作品全体についての筆者の見解を以下に概説しておく。

谷口孝介氏の著『菅原道真の詩と学問』には、以下のような一文を載せる。

二、一百韻形式の享受と意図

五言二百句からなる五言排律である「敘意一百韻484」が、『菅家後集』のみならず、道真の全作品の中でもっとも質量ともに充実したものであることは、衆目の一致するところである。

この雄篇が、杜甫が創始し白居易と元稹とが文学形式として定着せしめた一百韻形式の五言排律を倣ったものであり、ことに白居易「東南行一百韻 16-908」とそれに和した元稹「酬樂天東南行詩 一百韻 287」とに多くの措辞を捭りながら制作されたことについては、すでに川口久雄氏による詳細な指摘が存在する。

すでに川口氏も「(白居易の) こうした一百韻詩群の大作が、貶謫もしくは退居の失意のうちに連作されていることは注意すべく、(中略) 元稹の波瀾にみちた時期は正しく白居易の失意の時期と重なり、この両者がともに一百韻自照の長詩をよみかわしたところの東南行一百韻唱酬の二作は、両者のエネルギーが高まり交錯した接点に立つものといえよう」と指摘するよう

に、これらの元白の作品が「貶謫もしくは退居の失意」にかかわるものであることが重要である。(中略)元白の長排はいうまでもなくこの杜甫の作品の方法を継承して成ったものであるが、同じくして憂情ではあっても左遷をこれらの詩群の主題としたことが杜詩とは大きく異なる点である。したがって道真が「叙意」詩を一百韻形式によって制作した動機としては、一百韻という詩形式一般の性格に起因するというよりも、まさに白居易「東南行」が一百韻形式によって制作されていたからであると考えられる。つまりこの「叙意」詩の形式が一百韻であることによつて、おのずと同形式の白居易「東南行」を踏まえて作っていることを読む者に理解させ、意識に上らせる仕掛けとなつていたのである。

このように元白の一百韻詩をいっぽうに置いてこの「叙意」一百韻」を読むことで、この作品の性格もより明確に理解できる。元白詩との差異はまず詩題からも明白である。杜詩も含めて元白の一百韻詩はいずれも贈答詩である点が注目される。これらの作品は自己に係る詠懐を故友に理解を求める意図で制作されているのである。いっぽう道真詩はこの長詩の結聯で「叙意千言裏、何人一可憐」と、千言に尽くした自己の意に共感してくれる人物がいないう孤絶感をいって詠い収める。そうすると唐詩には絶えて見ない「叙意」といういっけんそっけない詩題にも、どのようにいっても周囲の人間に理解されない詩人の、万感の思いが託されているものと考えられる。

(第一節 「菅家後集」の世界―「白氏文集」を対称軸として―

二四九―二五二頁)

引用が長くなったが、筆者はこの谷口氏の一文はまさしく傾聴に値する卓見だと考える。そして、あくまでも推測の域を出ないが、更に次のような見解を提起したい。

それは「この「敘意」一百韻」の詩句内容が重層構造になつていのではないか」という事である。

つまり、この「敘意」一百韻」は、道真の意に反して僻地の太宰の地に左遷された「天涯孤獨」の絶望的な状況の中で詠まれた作品である。従つて、道真の心を慰むものは、同境遇の人々の生き方に擬うしかなかつたのではないか。しかもそれらの人々は道真の置かれている状況から考えて中国古典籍の中にしか求め得なかつたはずである。故にこの作品中には、多くの古人の事例が散りばめられている。この点からいえば、この「敘意」一百韻」は、道真の博学多識な事を、改めて読むものに印象付ける作品ともなつていいる。こうした詩句の中に込められた中国古典籍の故事・逸話・事例を丹念に読み解く作業を通してこの作品の意図するものを表出させるやり方が求められる一方で、先に引用した谷口氏の指摘されている、白居易・元稹の「東南行」一百韻」「酬乐天東南行詩」一百韻」両詩からの投影を念頭においた、道真の詩句内容の深層的なところの分析も求められる。そうしたのも重層させて考察した中から初めてこの「敘意

「百韻」で道真の言わんとするものが見えてくるのではないかと
という考え方である。

そこで筆者は、この「敍意一百韻」を複数回に分けて、前者
の分析方法である「字句」そのものに込められている中国古典
籍からの投影の指摘を主眼に注釈を進めてみたい。そして全二
〇〇句の注釈を終えた後に、改めて、後者の分析方法である、
主に白居易・元稹の先の二詩との比較を通して、全体の構成・
詩情等の分析を試み、深層に秘められたものを探りたいと考
えている。

今から注釈を進める上での「凡例」は前稿²⁾のそれに倣う。
以下、作品の注釈は便宜上、八句ずつに分けて行っていくたい。

二

484 敍意一百韻 (その一) 一句から八句目

本文

平仄

生涯無定地	○○○○●●
運命在皇天	●●●●○○
職豈圖西府	●●○○●●
名何替左遷	○○●●○○

貶降輕自芥	●●○○●●
駈放急如弦	○○●●○○
典赧顏施厚	●●○○●●
章狂踵不旋	○○●●○○

*脚韻は下平声「先」韻。韻字は「天・遷・弦・旋」である。

校異

- 敍：叙(●) (彰考)
- ▼頭注「有五言二字分注」…(大島)
- 弦：絃(○) (静嘉)(尊四)
- ▼頭注「弦作絃」…(大島)
- 愈：逾(○) (内閣)(大島)(松平)(彰考)
- ▼頭注「逾作愈」…(大島)
- (太二) [刊本] 全本

訓読

- ・生涯 定地 無し
- ・運命 皇天に在り
- ・職 豈に 西府を圖んや
- ・名 何ぞ 左遷に替らんや
- ・貶降せらるること 芥より輕し
- ・駈放せらるること 弦より急なり

・ 煥赧して 顔 愈いよ 厚し
・ 章狂して 踵 施らさず

通釈

・ 人の一生というものには、定まった状態とてなく
・ その人間の運命は、天を支配する神に全てを委ねられている。
・ まさか私自身が、鎮西の太宰権帥といった職を手にしようと考えたことがあっただろうか。
・ 右大臣の職から（突如として）左遷の身に替わろうとは一体どうしたことがか。

・ 官位をおとしりぞけられること、塵芥よりも軽くあしらわれ
・ 京から追い払われること、弓から矢が放たれるかのようにせかされた。

・ （その事態の当事者である私は）恥ずかしさで赤面し、それが高じて、顔面がいよいよ厚くなる。
・ （その事態に遭遇して）あわてふためき追放される様は、踵を向きかえる時間もないほどであった。

語釈

○生涯…一生の間。命の限り。死ぬまで。

〔莊子〕「養生主」に「吾生也有涯、而知也無涯」の事例が見える。〔杜甫〕「江畔獨步尋花詩」に「報答春光知有處、應須美酒送生涯」の句が見える。『漢語大詞典』には「語本《莊子・養生主》『吾生也有涯、而知也無涯』原謂生命有邊際。限度。後指生命、人生」と説明し、〔陳沈炯〕の「獨酌謠」の「生涯漫漫、神理暫超超」の句を引く。『文華秀麗集〕「奉和侍中翁主挽歌詞二首」（晉清公）に「雖覺生涯理、人情尚可悲」の句が、「奉和侍中翁主挽歌詞二首」（巨識人）に「夜谿生涯盡、佳城艷骨淪」の句が見える。『田氏家集〕「208 題竹林七賢圖」に「生涯每寄孤雲片、世慮都忘一醉中」の句が見える。『菅家文章〕「93 奉和兵部侍郎哭舍弟大夫之作」に「魂世歸來何處憑、生涯不遇痛無勝」の句が、「347 哭田詩伯」に「哭如考妣苦澹茶、長斷生涯燥濕俱」の句が、「272 驚冬」に「不愁官考三年黜、唯歎生涯万事非」の句が、「360 假中書懷詩」に「悠悠皆果報、出入苦生涯」の句が見える。大詞典〕には「①迷信指令中注定的生死、貧富和一切遭遇」との説明を載せ、「宋鮑照」の「擬行路難詩之十八」の句「對酒敘長篇、窮途運命委皇天」を引く。

又「張賀」の「游仙窟」の句「嗟運命之速邁、歎鄉關之邈」を引用する。『菅家文章』「端午日賦艾人」に「運命歡逢端午日、追尋恐聽早鷄鳴」の句が見える。

記す。この道真の左遷の事情については、所功氏の論文に詳しい。³以下、いちいち断らないが、歴史的背景の記述は、この所氏の学恩に拠る。

○皇天…天の敬称。又天の主宰神。『書経』「大禹謨」に「皇天

○西府…九州。大宰府の別称。『菅家後集』「490 雪夜思家竹」

譽命、奄有四海、奄有四海、為天下君（傳）言堯有此德、故為天所命」の用例が、又「楚辭」「九章 哀郢」

に「西府興東籬、關山消息絶」の句が見える。

に「皇天之不純命令、何百姓之震愆」の用例が見える。

○名何替左遷…道真は、昌泰四年（九〇一）正月七日に、藤原

『漢語大詞典』には「対天乃天神的尊称」として『楚辭』「離騷」の「皇天無私阿兮、覽民德焉錯輔」の例

時平とともに従二位に叙せられ、右大臣となった。そして正月二十五日に突如として『政事要略』等に載せる醍醐天皇の宣命によつて、大宰権帥の左遷が命ぜられたことを言う。川口久雄氏が古典大系本の頭注で言

を引く。『白氏文集』「282 予與微之老而無子。發於言歎。著在詩篇。今年冬各有月一子。戲作二什。一以相賀。一以自嘲」に「陰德自然宜有慶、皇天可得道無知」

及されているように、「右大臣従二位」という職から、左遷という名に替わることなどは一体どうしたことか。」の句意で、「右」と「左」を対比させた表現である。「左遷」の語は『漢書』「周昌傳」に「吾極知其左

の句が、又同じく「2783 哭微之二首」に「妻孥朋友來相弔、唯道皇天無所知」の句が見える。『菅家文章』

遷、（注）帥古曰、是時尊右而卑左、故謂貶秩位、為左遷」とあるように、「官位を降しおとす。官を卑しくして遠地に流す。貶謫」の意である。『漢語大詞典』

「47 哭管外史、奉寄安著作郎」に「命矣皇天相與奪、高才不遇傳先存」の句が見える。

では「降官・貶職」と説明する。『菅家文章』「187 北堂餞宴、各分一字」に「我將南海飽風煙、更妬他人道左遷」の句が、又『菅家後集』「511 代月答」に「天廻玄鑑雲將舞唯是西行不左遷」の句が見える。

↓ 補説

○職 ……ここでは大宰権帥を指す。昌泰四年（九〇一）正月二

十五日、道真らの左遷決行がなされたことが、『日本紀略』の中で「諸陣警固。帝御南殿。以右大臣従二位

菅原朝臣任大宰権帥。以大納言源朝臣光任右大臣」と

菅原朝臣任大宰権帥。以大納言源朝臣光任右大臣」と

廻玄鑑雲將舞唯是西行不左遷」の句が見える。

○貶降…官位を落とししりぞけること。貶退。『漢語大詞典』には「貶官降職」と説明し、「元稹」「中書省議舉曇令状」の「本學良能、冀蒙優獎、皆居破碎之處、怖同貶降之儀」の例を引く。類語の例として『菅家後集』「485 秋夜九月十五日」に「昔被榮花簪組縛、今爲貶謫草萊囚」の句が見える。

○輕自芥…「芥」は「小さい草。転じて、あくた。ごみ。ちり」の意。川口久雄氏は大系本の補注で「日本の表現（輕）に連接する語は〈塵〉の字である」と言及されている。ここでは、「塵芥より軽くあしらわれ」と解した。

○駈放…馬をむちうつかのように駈り放り出されること。『漢語大詞典』には「策馬奔馳」と説明する。

○急如弦…「弦」は「急」の意で、『説文』「段注」に「弦、有急意。故董安于、性緩佩弦以自急」の説明がある。川口久雄氏は大系本の補注で、「〈弦の如し〉は、元來、直ぐなることの形容。漢書、五行志に〈直如絃、死道辺、曲如鉤、友封侯〉とあり、文集、孔戡にも〈其道直如絃〉とある。ここは脚韻の関係で、〈如箭〉といふべきところを〈如弦〉としたのであろうか、日本の表現と見るべきである。白居易の「東南行一百韻」

に、彼が追放せられた日のことを叙して、〈即日双關を辭し、明朝九衢に別る〉とある」と言及されている。この四、五句目の「官位をおとししりぞけられること、塵芥よりも軽くあしらわれ、今日から追い払われること、弓から矢が放たれるかのようにせかされた」という句意は、次のような事件の経緯を示す。

昌泰四年（九〇一）正月二十七日、『政治要略』卷二十二には、「左衛門少尉正六位上善友朝臣益友、（中略）件人、為領送權帥從二位菅原朝臣、發遣如件。府宜承知之。但、任中雜棒斬并監從、及不預釐務。依前外帥正三位藤原朝臣吉野例行之。又山城・撰津等國、天給食馬。路次國、又宜准此」との記事があり、『扶桑略記』には「左降勅使左衛門佐藤原真興、左近走馬、近衛十人、追送迄撰津國」の記事が見える。平田耿二氏は、この記事の箇所を以下のように説明する。

政府が正月二十七日に出した太宰府宛の通達によると、左衛門少尉善友益友が左右兵衛から兵士各一人を率いて道真を護送すること、道真には俸給も從者も与えず、政務に与らせてはならないこと、山城・撰津をはじめとする道中の國々は、食料や馬を給してはならないとある。（中略）この処遇は、前の員外帥正三位藤原吉野の例に依るものだとしているが、吉野には淳和天皇に寵愛された文人政治家で、承和

の変で皇太子恒貞親王（淳和天皇の子）の關係者として嫌疑をかけられ、配流された人物である。道真の処遇を吉野の例に準ずるよう命じたということは、承和九年（八四二）七月に起った皇太子廢立事件（承和の変）と、道真の配流事件をたくみに重ね合わせようとしていたことを示している。（中略）京から摂津までは左降の勅使として左衛門佐（近衛隊長 藤原真興が近衛十人を率いて馬で追走した。）⁵そして昌泰四年（九〇二）二月一日、『日本紀略』には「今日、権帥（道真）向任」の記事が見える。その時の事は、道真は自身の言葉で、『菅家後集』「477 詠楽天北窓三友詩」中で「自從勅使駈將去、父子一兒五処離」と詠み、同じく、「483 慰少男女」中で「衆婦惣家留、諸兄多謫去」と詠んでいる。これは、道真の左遷決定に連座して、息子達四人、大学頭であった「菅原高規」が土佐介に、「菅原景行」が式部大丞から駿河権介に、又「菅原兼茂」が佐衛門尉から飛驒権掾に、「菅原淳茂」が文章得業生から播磨に左降されたことを指す。

○換赧：「換」も「赧」も恥じて赤面すること。

○顔厚：恥じて赤面を重ねるうちに、鉄面皮になってしまふ。

『漢語大詞典』には「臉皮厚。謂不知羞耻」と説明し、『書経』「五子之歌」の「鬱陶乎予心、顔厚有忸怩。（孔傳）顔厚、色愧」の用例を引く。

○章狂：あわて狂うこと。『漢語大詞典』では「倉皇」（慌てふためく）・「慌張」と説明し、『蘇軾』の「謝量移汝州表」の「隻影自憐命寄江湖之上、驚魂未定、夢游縲紲之中、憔悴非人、章狂失志」の用例を引く。

○不旋踵：「不暇旋踵」の略。踵をめぐらす間もないこととで、時を移さないこと。不得旋踵。

『漢書』「京房傳」に「不量傳淺深、危言刺譏、構怨強臣、罪古辛不旋踵」の用例が見える。

補説

○二句目「運命在皇天」の「皇天」に込められている中国古典籍の考察

この「皇天」については、既に 語釈の頁で、『書経』「楚辭」等に用例が見えることは言及した。

ところが実は、この語は、次の「宋玉」の「九辯五首」からの投影を通して考察すべきものではないかと考える。その根拠を若干以下に述べてみる。

全釈漢文大系本の「九辯五首」の頁には次のような作品解説

と、各章の要旨・原文通釈・語釈等を載せる。それを引き、論を進める。

まず、この「九辯五首」については「屈原の弟子とされる宋玉の作である。(中略)「九辯」の意味については「宋玉其の師の忠信にして放たれしを惜しむ。故に此の辞を作りて以て之を辯ず。皆原の意に代わる。九の義も亦九歌と同じ」と五臣注にいう(中略)「辯」は忠邪の分かれる所以を釈き、師に代わってその冤罪を弁明する意である。即ち、本文中の「余」「我」などの一人称は全て宋玉が屈原の立場に立って述べたものである。『文選』では、「九辯五首」として初めの五章を収載している。「九辯五首」題意 72～73頁)との概説がある。この作品の三章・四章に次のような「皇天」の用例を見ることが出来る。

▼三章

皇天平分四時兮 竊獨悲此慶秋

皇天四時を平分す 竊かに獨り此の慶秋を悲しむ

(皇天は四時の季節を公平に分けてあるが、私は獨りこの冷え冷えとした薄ら寒い秋を悲しく思う。)

▼四章

皇天淫溢而秋霖兮 后土何時而得乾

皇天淫溢して秋霖す 后土何れの時にか乾くを得ん

(天はとめどなく水を溢れさせて秋の長雨を地面に降らせ、大地はいつの日か乾くことがあろうか。)

更に、この作品全体に視点を移すと、(以下全釈漢文大系本『文選』「九辯五首」「要旨」を引用する)第一章は、「草木の揺落する悲愁の秋の氣の中、流謫の旅にあって孤独寂寥の感興を起す」第二章は「忠誠の思いも空しく、かえって君から遠ざけられ追放されるに至ったことを追懐しつつ、我が身の不遇を嘆き悲しむ」第三章は「秋から冬へと季節は推移し、万物の凋落に心は傷み悲しむ。これにも似た我が身の境遇を思つて憂愁の情に閉ざされる」第四章は「君を思い慕う心はなお強く、今一度、事の是非を明らかにして我が誠心を君に伝えたいと念じたが、その手立ても阻まれて、ただ嘆息するだけである。」そして第五章は「時俗の人は小利口に立ち回り、立派な賢者は世に容れられない。君に期待をかけたつも、不遇の我が身を思つて限らない悲哀感を抱く」と締める内容である。この作者である宋玉が屈原に仮託して、楚の懷王を想う心情を、道真に移すと、左遷の宣命を出した醍醐天皇、それを阻止しようとした宇多上皇を想うそれと酷似していることに気付く。本意な太宰府左遷、無実の心情を伝える術のない絶望的狀況にあつたであろう道真に、この宋玉の「九辯五首」は、どれほど心の支えになつたか想像に難くない、まさしく道真自身の今の心情の代弁ともなっているこの作品を「皇天」という共通の詩語を使つて、この道真の詩を読むものに想起させるといふ構造になつてゐる所を見逃してはなるまい。

484 敘意一百韻 (その二) 九句目から十六句目

本文 平仄

牛涔皆培穿	○○○○●●
鳥路惣鷹鷗	●●●●○○
老僕長扶杖	●●○○○○
疲驂數費鞭	○○●●○○
臨岐腸易斷	●●○○●●
望闕眼將穿	○○●●○○
落淚欺朝露	●●○○○○
啼聲鵲杜亂	○○●●●●

* 脚韻は下平声「先」韻。韻字は「鷗・鞭・穿・亂」である。

校異

○惣…惣 (●) 刊本 全本

○闕…開 (●) (彰考) (尊一) (尊三)

○亂…乱 (彰考)

訓読

牛涔 皆 培穿

鳥路 惣て 鷹鷗

老僕 長に 杖に扶けらる

疲驂 數しば 鞭を費す

岐に臨みて 腸 断へ易し

闕を望みて 眼 將に穿んとす

落涙、朝露を欺く

啼聲 杜鵑を乱す

通釈

- ・(太宰府へ放逐されて行く道々での) 牛のひずめの跡のわずかな水たまりさえも私には(大きな) 落とし穴のように思え(大宰府へ放逐されて行く) 鳥の飛ぶ道には、(いつも) 鷹やはやぶさが待ち構えているように思えた。

- ・老僕は、その長い道すがら、いつも杖に助けられ、私につき従った。

- ・(余りの道程の長さ)に 疲れ切った馬を進ませるのに、何度も何度も鞭をあててきた。

- ・京からの別れ道に立つては、腸がちぎれるほどの筆舌に尽くし難い悲しみを味わって来た。

- ・遠く京都の宮城をあとにし、(これが見納めになるのでは、と) 目が穿つほど、その情景を凝視したものだ。

・別れに及んで流す涙は、着物に落ちた朝露と見違えばかり。
・(別れに及んで)泣く声は、(哀切悲愴な鳴き声で知られている)杜鵑のそれをかき乱すほどのものであった。

語釈

○牛涔：「牛蹠之涔」。牛の足跡のたまり水。僅かな水。『淮南子』「汜論訓」の「牛蹠之涔、不能鱣鮪、而蜂房不容鵝卵」に典故を取る語。

▼「牛蹠之涔、無尺之鯉」(ぎゅうていのしんには、しゃくのりなし)

↓牛の足跡のたまり水には大魚は住まない。狭小の處には大器は生じない喩。『淮南子』「俶眞訓」の「夫牛蹠之涔、無尺之鯉、塊阜之山、無丈之材、所以然者何也。皆其營宇狭小、而不能容巨大也」に拠る一文も見える。『漢語大詞典』には「牛足印中的水。比喻狭小的境地。語本《淮南子·汜論訓》「夫牛蹠之涔、不能生鱣鮪。高誘注、涔、雨水也。滿牛蹠中、言其小也、故不能生鱣鮪也」と説明する。

○埒穿 …… 落とし穴

○鳥路…鳥の飛ぶ道。一直線の道筋をいう。『漢語大詞典』では「鳥道」と説明し、「韓愈」の「憶昨行和張十一」

の「陽山鳥路出臨武、驛馬拒地驅頻墮」を引く。『白氏文集』1043 送友人上峽赴東川辟命」に「難於尋鳥路、險過上龍門」が見える。『菅家文章』374 遊龍門寺」に「人如鳥路穿雲出、地是龍門趁水登」の句が、又「428 重陽侍宴、同賦秋日懸清光、應製」に「深追合璧龍宮徹、遠任孤輪鳥路平」の句が見える。

○鷹鷂…たかと隼。物を害する力あるものの喩

▼「如鷹鷂之逐鳥雀」ようせんのちようじゃくをおうがごし。

猛烈に奸邪を誅伐することの喩。

『春秋左氏傳』(文公十八年)に「見無禮於其君者、誅之、如鷹鷂之逐鳥雀也」に拠る語。『漢語大詞典』では、(一) 比喻忠勇的人。語出「左傳」文公十八年 見無禮於其君者、誅之、如鷹鷂之逐鳥雀也」(二) 比喻凶殘的人」と説明し、「劉向」の「説苑」(敬慎)「臣聞之、行者比於鳥、上畏鷹鷂下畏網羅」の用例を引く。

○老僕…年をとったしもべ。老奴。川口久雄氏は、古典大系本の補注で「五〇七に〈老僕要綿切〉とある人と、この老僕はおそらく同一人」と言及されている。(七二九頁)その他に『菅家後集』360 假中書懷詩」に「日高催老僕、掃除庭上沙」の句が見える。

○扶杖…つえにたよる。『史記』「萬石君傳」に「萬石君卒、長

子郎中令建、哭泣哀思、扶杖乃能行」の例が見える。

『漢語大詞典』には「扶杖（＝支杖）」と説明し、「韓愈」の「人日城南登高」詩の「扶杖陵圯隤、刺船犯枯葑」の句を引く。

『菅家文章』「231 重答」に「今朝幸軟慙慙問、扶杖歸時斗米堤」の句が見える。

○疲驂…疲れた副馬。『漢語大詞典』では「猶疲驚、常以謙言

己無能」と説明し、「李紳」の「肥河維舟阻濼祇待勅命」詩の「疲驂豈念前程稅、倦鳥安能待暮還」の句を、又「元稹」の「為肅相國讓官表」の「自顧疲驂方求息駕、豈謂陛下特遷宸鑒、曲用朽才」の用例を引く。『菅家文章』「75 秋日山行二十韻」に「疲驂嘶布水、老僕困綿嶠」の句が見える。

○費鞭…鞭を（何度も）あてる。『白氏文集』「811 初授贊善大

夫早朝寄李二十助教」に「遠坊早起常侵鼓、疲驂行逢苦費鞭」の句が見える。『菅家文章』「331 感白菊花、奉皇尚書平右丞」に「故人知我多芳意、所以孤叢望費鞭」の句が見える。

○臨岐…人を送り、岐路に至って別れる。『漢語大詞典』には

「本為面臨岐路、後亦用為贈別之辭」と説明し、『文

選』「鮑照」の「舞鶴賦」の「指曾規翔、臨岐矩步李善注、岐、岐路也」の用例を、又「杜甫」の「送李校書」詩の「臨岐意頗切、對酒不能喫」の句を引く。

○腸易斷…「断腸」甚だしく心を痛める。又、甚だしい悲しみ。

はらわたのちぎれる程の悲しみ。『漢語大詞典』には「①割開或切断腸子 ②形容極度思念或悲痛」と説明し、「曹丕」の「燕歌行」の「念君客遊思断腸、慊慊思歸戀故鄉」の句を、又「李白」の「清平調」詞之二の「一枝紅艷露凝香、雲雨巫山柱断腸」の句を引く。

『白氏文集』「916 答春」に「其奈山猿江上叫、故鄉無此断腸聲」の句が、同じく「1142 送蕭處士遊黔南」に「江從巴峽初成字、猿過巫陽始断腸」の句が見える。『凌雲集』「61 雜言奉和聖製春女怨」に「君若欲知腸斷處 高樓明月曉孤懸」の句が、同じく「奉和江亭曉興詩應製」に「曉猿莫作斷腸叫、四海為家帝者心」の句が見える。（補説 ①）

○望闕…宮城をのぞむ。天子を恋慕うこと。『白氏文集』「興

崇文詔」に「望闕之戀深固難奪志」の例が見える。『漢語大詞典』には「②仰望宮闕。喻懷念天子」と説明する。「闕」の字は、尊経閣所蔵本他には「關」とするが、

この語の意は、「門の柱のますがた」なので、この句の意をなさない。因つて刊本その他の書写本にある「闕」の字を採る。『菅家文章』「298 八月十五日夜、思舊有感」に「如何窮溢思親處、况復潮寒望闕時」の句が見える。

○眼穿…物に穿ち入るように目を据えて見つめること。「李商隱」の「落花詩」に「腸斷未忍掃、眼穿仍欲稀」の句がある。『菅家文章』「111 夏夜於鴻臚館、饒北客帰郷」に「腸斷前程送日、眼穿後紀転來星」の句が見える。

○落涙…涙を流す。又、落ちる涙。「魏文帝」の「見挽船士兄弟辭別詩」に「妻子素衣袂、落淚霑懷抱」の句が見える。『田氏家集』「37 於右丞相省中直廬讀史記詠史得高祖應教」に「萬乖威加新海内、數行淚落故鄉情」の句が見える。『菅家文章』「501 題竹床子」に「空心舊為遙踰海、落淚新如昔植湘」の句が見える。又「476 自詠」に「離家三四月、落淚百千行」の句が見える。

○朝露…朝のつゆ。久しくない喩。はかない喩。『漢語大詞典』には「①早上的露水 ②比喻存在時間短促」と説明し、『漢書』「蘇武傳」の「人生如朝露、何久自苦如此。顔師古注、朝露見日則晞、人命短促亦如之」を引く。

『白氏文集』「0048 薛中丞」に「不然君子人、何反如朝露」の句が、又「416 勸酒寄元九」に「薤葉有朝露、槿枝無宿花、君今亦如此、促促生有涯」の句が、「079 泰中吟十首」に「朝露負名利、夕陽憂子孫」の句が見える。『文華秀麗集』「90 奉和侍中翁主挽歌詞二首 菅清公」に「向朝傷薤露、欲暮泣楊風」の句が見える。『凌雲集』「64 奉和傷右近衛大將軍坂宿禰 御製」には、「滋叢唯泣早朝露、古木空浮薄暮煙」の句が見える。

○啼聲…声を出して泣くその声。「泣」が「なみだをこぼす」意に対し、「啼」は「声をあげて悲しみなく。人・鳥獸を通じていう。〈啼鳥〉は悲しみ鳴く意味ではないが、声をあげることについていう。〔新字源〕「同訓異義」の頁 1273頁)

『菅家文章』「95 路次、觀源相公舊宅有感」に「殘燼華埤苔老色、半燠松樹鳥啼聲」の句が見える。

○杜鵑…ほととぎす。蜀王杜宇の魂が化してこの鳥になったという。子蔭、子規・催歸不如歸等の諸名があるのは其の声を各方音に随って呼ぶからである。

「杜宇」…ほととぎすの一名。血を吐くような悲痛な声で啼く。其の声・不歸歸去と聞こえるという。「左思」の「蜀都賦」に「碧出衰弘之血、鳥生杜宇之魂」

の句がある。「漢語大詞典」には「鳥名。又名杜宇、子規、相傳為古蜀王杜宇之魂所化。春末夏初、常晝夜啼鳴。其声哀切」と説明し、「杜甫」の「杜鵑行」の「君不見昔日蜀天子、化作杜鵑似老鳥。寄巢生子自啄、群鳥至今與哺雛」の句を引く。『白氏文集』「540 江上送客」に「杜鵑聲似哭、湘竹斑如血」の句が、「592 送春歸」には「何處送春曲江曲 今年杜鵑花落子規啼」の句が、又「603 琵琶引」に「其間且暮聞何物 杜鵑啼血猿哀鳴」の句が見える。『文章秀麗集』「23 敬和左神策大將闌、閑院花亭餞兩官」の句が見える。

↓ 補説 ②

補説 ①

○十三句目「臨岐腸易斷」の「腸易斷」に込められている故事
大漢和辞典の「断腸」の項で「晉の桓温が三峽を過ぎた時、其の従者が猿の子を捕らえた。母猿が之を慕って哀号し、追行すること百余支里、ついに悶死した。其の腰を割いて見るのに、腸が寸々に断ち切れていた」と説明するように、『世説新語』の以下の故事を踏む。

『世説新語』・「黔免」桓公入蜀、至三峽中。部伍中有猿子者、其母緣岸哀號、行百餘里不去、遂跳上船、至便絶、破視其腹中、

腸皆寸寸斷、公聞之怒、命黜其人。

補説 ②

○十六句目「啼聲鵑杜亂」の「杜鵑」に込められている故事

松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店）の「杜鵑（子規・不如婦）」の項で次のような説明がある。

ホトトギス。長江の中流から上流にかけて、多く生息する鳥である。中国の文学に、この杜鵑（子規）が頻繁に詠まれるようになるのは、盛唐以後のことである。（中略）杜鵑は、この『芸文類聚』に採録されていない。つまり杜鵑は、比較的遅れて詩文の題材となっていた鳥、ということになる。

杜鵑には、古い伝説がある。西晉、左思の「三都賦」のひとつ「蜀都賦」に「付けられた旧注に、『蜀記』を引いて言う。「かつて杜宇なる人がいた。彼は、蜀を治めて望帝と号した。杜宇が死んだとき、子規に姿を変えた。子規とは、鳥の名である。蜀の人々は、子規の鳴く声を聞くと、皆口々に、望帝が来た、と囁いた。」この化鳥説話に依れば、杜鵑（子規）は、望帝の落ちぶれたなれの果て、ということになる。

（IV漢詩を読むポイント）（用語） P 660～P 661

この一文は、『文進』「蜀都賦」の「碧出襄弘之血、鳥生杜宇之魄」の注の一部

蜀記曰。昔有人、性杜名宇。王蜀號曰望帝。宇死。俗説曰。宇化爲子規。子規鳥名也。蜀人聞子規鳴皆曰望帝。

の一文を指している。更に続けて『漢詩の事典』では、「杜甫」の「杜鵑行」の一部を引きながら次のように説明する。

この詩の杜鵑には、三点、注目すべきことがある。第一に、蜀（成都）の鳥とされていること。第二に、杜宇（望帝）の化身であること。第三に、杜鵑の、他の鳥の巢に卵を産みつける託卵の習性を取り上げて、これを望帝に対する臣下の忠誠として、描いていることである。この三点は、その後の杜鵑を詠ずる詩に、濃淡の差こそあれ反映されるものである。（中略）杜鵑が鳴く晩春には、躑躅が咲く。その花の紅さは、杜鵑の啼いて滴らす血によって染められたものと言われている。

〔IV 漢詩を読むポイント〕（用語） p.662

以上、道真是、九句目から十二句目までの四句で「大宰府に着くまでの道中の心情・情景の概観」を詠い、十三句目から十六句目で「大宰府に着くまで、とりわけここでは、京での別離の情景と心情」を、蜀の猿の故事と、同じく蜀の望帝の化身であると鵑の故事を響かせて、それがいかに非情で、過酷なものであったのかを言外に込めた詠いぶりとなっている。

【注】

〔1〕 柳澤 良一氏『菅家後集』注解稿（九）「金沢大学 国語国文」30号

〔2〕 拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（一）―」

〔国語国文学研究〕第三十六号 熊本大学国語国文学会

〔3〕 所功氏「菅原道真の配流」

〔菅原道真と太宰府天満宮上〕吉川弘文館 五十五～五十八頁

〔4〕 岩波古典文学大系『菅家文章 菅家後集』

四八四補注（一）七二九頁

〔5〕 岩波古典文学大系『菅家文章 菅家後集』

四八四補注（二）七二九頁

〔6〕 平田耿二氏『消された政治家 菅原道真』

文春新書一七九～一八五頁

〈追記〉（一）

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大のご助力をいただいた。とりわけ、語釈「白氏文集」の詩語の検索などにお力添え頂いた事に深謝申し上げる。

又、台湾元智工學院の中国古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀 (BrGS)」(<http://ds.admin.yzu.edu.tw/>) の『全唐詩』の項、及び北京大学中文系の唐代以前の詩歌の総合データベースである「全唐詩全文檢索系統 (UTF-8)」(<http://chinese.pku.cn/cgi-bin/tanglibrary.exe>) を詩語検索の為に大いに利用した。

〈追記〉(二)

今年度四月より、「大牟田市民大学講座」(市民大学ゼミ、道真梅の会の会員、須藤修一氏・諸田素子氏、田中陽子氏、野田了介氏、井原和世氏、荒川美枝子氏の六名と定期的に「叙意一百韻」の講読会を催している。本稿は、この会で討議・検討したものを基に加筆し稿をしたためたものである。

(やきやま ひろし／大学院第七回修了・有明高専)